

ダイズ白絹病 (病原菌 : *Sclerotium rolfsii*)

○ 被害と発生生態

本病は糸状菌による病害である。本病原菌は極めて広い寄主範囲を持つ。

本病は、梅雨時期と8月下旬～9月の時期に発生が多い。夏期高温乾燥時の発生はやや少ない。本病は多湿条件で発病が助長される。本病原菌は比較的高温性であるが、夏期の高温期よりも、気温がやや低い時期に発病が多い。

地際部または地下部、皮層部が軟化し、先端部の本葉が黄化してしおれる。発病が進むと立ち枯れ症状を呈する。発病初期には地際部がアメ色に変色、軟化し、その後白色の菌糸、粟粒大の菌核の形成が認められることがある。

第一次伝染源は越冬した菌核が主体である。種子伝染の例も知られている。土壌中にワラなどがあると菌核から発芽した菌糸がそこで勢いをつけて、ダイズに到達する。

○ 防除方法

(ア) 耕種的・物理的防除

- ・ほ場外への排水対策、高畦にするなど過湿害を防ぐ。
- ・土壌 pH が 6.5 を超えると菌核の発芽が抑制されるので、土壌の pH を高める。
- ・麦わら、稲わらなど、粗大有機物の投入をひかえる。
- ・被害株の菌核を落とさないようにほ場外に持ち出し処分する。また、被害株周辺の表層土には、菌糸や菌核が残っているのではほ場外へ除去する。
- ・深耕、ほ場の冬期多湿管理、田畑輪換は、病原菌を減少させ、発病を抑制する。
- ・密植は発病を助長するので、適正播種を行う。
- ・土寄せ作業は降雨の影響がない日に実施する。



ダイズ茎の地際部に形成された
菌核と菌糸